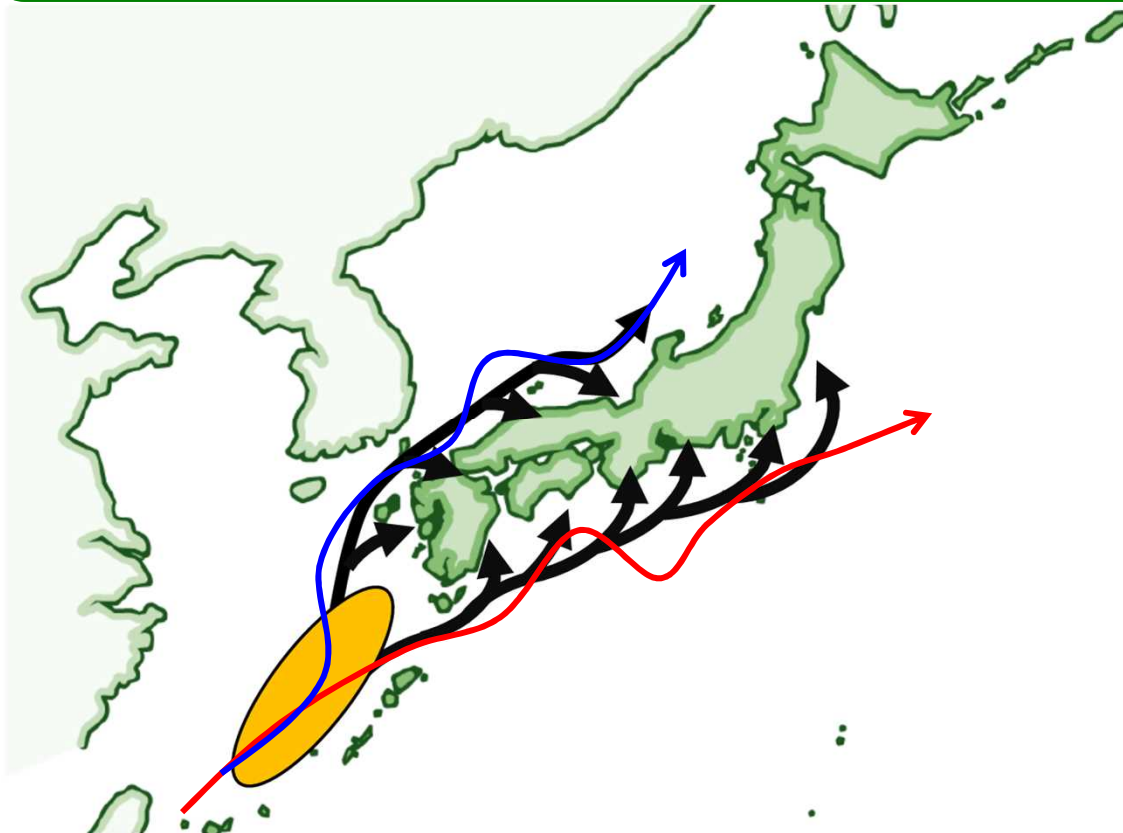


稚魚の移動

ブリの稚魚は春季に流れ藻につき
東シナ海から日本沿岸各地に流される
流れ藻に付随できる稚魚の方が生残がいい



ブリの稚魚(モジャコ)

← 対馬暖流
← 黒潮

ブリ種苗採捕尾数の推移

千尾

(%)

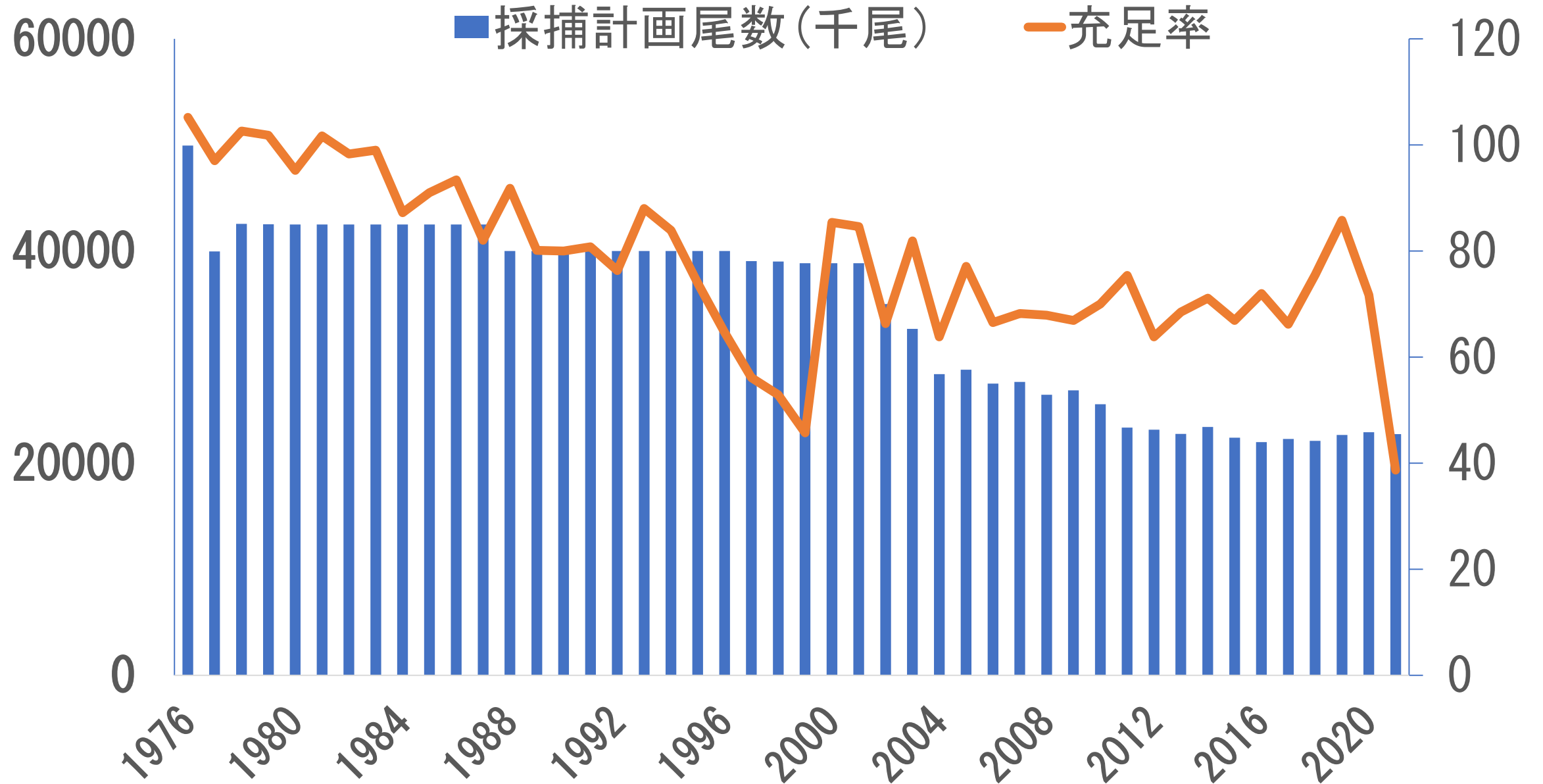
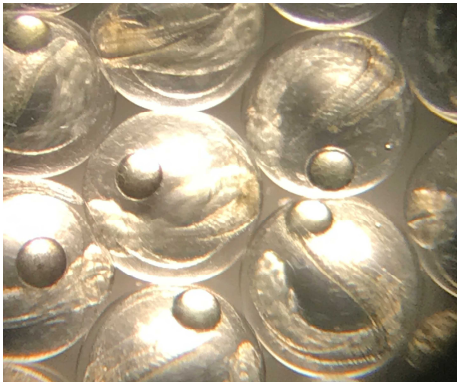


表 ブリ類養殖海外との違い

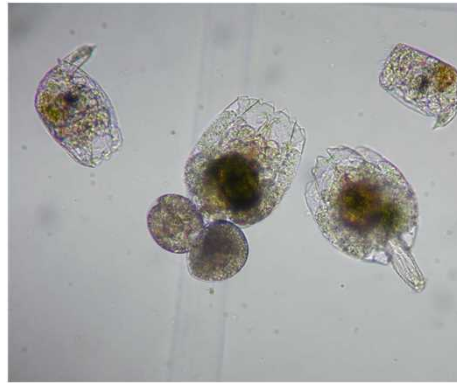
項目	日本	オランダ
魚種	ブリ	ヒラマサ (Seriola lalandi)
養殖期間・出荷サイズ	15～24ヶ月以上 (3kgアップ～4kg以上)	不明 (卵から12ヶ月で3.5kg)
種苗導入	天然種苗を毎年3～4月に池入れ、一部、企業等による人工種苗導入 (早期池入れ)	親魚養成、人工種苗を周年池入れ 育種の展開で普段から完全養殖と選抜育種
養殖ビジネスに関するシステムの違い	主にもじゃこ採捕、中間育成、養殖生産、出荷、販売、餌料の供給 (分業性)	種苗から生産まで一貫した垂直統合型ビジネス (インテグレーション)
需要	国内需向け及び一部アメリカ向け (輸出)	アメリカ、EU圏内
マーケティング	産地にある個別の民間企業、漁協等の努力によりブランド化、差別化	国境を越えて生産も視野、陸上閉鎖循環飼育を消費地近郊で展開し超高鮮度流通を目指す
戦術・技術	各県、各産地、各企業でブランド販売戦術や飼育技術開発を実施 (オールジャパンの動きは少ない)	飼育しやすいヒラマサを選定し、さらには育種と陸上閉鎖循環飼育のベストミックスで展開

人工種苗が養殖生産されるまで

親魚養成



種苗生産



種苗出荷



中間育成場

養殖場

ブリ人工種苗の良い面と課題

良い面	課題
生産効率の向上 養殖計画が立て易くなる	コスト高・供給量不足
種苗の周年出荷・サイズの均一化 (定時・定量・定価格・定品質)	周年出荷の場合は地先水温との ミスマッチ
夏場の高価格取引 (成熟による身質低下回避)	親魚養成・種苗生産のヒト・モノ・カネ
認証制度への適合 (輸出に有効)	種苗生産施設
トレーサビリティ、サステナビリティ	遺伝的多様性の維持・近親交配の防止
育種による改良	選抜育種の脱走防止

1. 人工種苗での養殖の将来性

- ①将来性をどこに感じるか
- ②人工種苗の本当の価値
- ③海外への輸出商材として 等々

2. 人工種苗普及実現までの課題

- ①人工種苗が普及するための条件・課題（需要など）
 - ・親養成・採卵・種苗生産の施設、規模の拡大
 - ・養殖漁場（中間育成・沿岸・沖合・免許の取得）
 - ・養殖従事者と効率的な機器の導入（ICTおよびロボティクス）
- ②需要の掘り起こし
- ③資金の循環（事業としての成立、経済的判断）

3. スケジュール

（政府方針：2050年までにブリ、カンパチ等の人工種苗比率100%を実現する）
種苗池入れへの段階的な割合向上かそれともベースの底上げ尾数とするか（生産尾数の設定）